

第 165 回

番組審議会議事録

平成 19 年 7 月

株式会社 TVQ九州放送

7 月度番組審議会議事録

1. 開催年月日 2007 年 7 月 26 日 (木)
2. 開催場所 T V Q 本社 役員会議室
3. 委員の出席 委員総数 8 名 出席委員 8 名
出席委員 安永幸一委員長 久保祐二副委員長 伊豆美沙子委員
礒山誠二委員 古賀美智子委員 阪本浩伸委員
南博文委員 森本廣委員
社側出席者 牧作樹社長 河西敬一専務取締役 野中大蔵常務取締役
深瀬直治編成局長 矢上尚宏編成部長
小曾我信行放送審議室長 下平敦子放送審議室課長
4. 議題
 - (1) 一般業務報告
 - (2) 視聴率報告
 - (3) 視聴者対応報告
 - (4) 番組試写・合評
5. 議事の概要
 - (1) 視聴率報告
 - (2) 番組試写・合評
「三丁目のポスト」
7 月 23 日 (月) 午後 8 : 00 ~ 8 : 54
6. 審議内容
7. 審議機関の答申又は改善意見に対してとった措置及びその年月日
該当なし
8. 審議機関の答申又は意見の概要を公表した場合におけるその公表の内容、方法及び年月日
審議内容を自社番組「T V Q 放送番組審議会から」(8 月 12 日) で公表
書面備え置き 福岡本社
インターネット等
9. その他の参考事項
該当なし
配布資料
2007 年度 6 月期視聴率報告
2007 年度 6 月視聴者対応報告

(小曾我放送審議室長) 定刻になりましたので、委員長よろしくお願い致します。

(安永委員長) 今日は全員ご出席なんですけど、磯山委員が20分ほど遅れられるということでございますので、定刻通り始めたいと思います。

7月期放送番組審議会、ただいまから開催をします。それでは、まず一般業務報告を牧社長からお願い申し上げます。

(牧社長) 本日は、大変お暑い中をご出席いただきまして、ありがとうございます。業務報告を致します。さほど大きな報告はございませんが、幾つか話題をお話ししたいと思います。

最初は、私どもが制作しています「九州経済NOW」という、毎週土曜日朝9時からの1時間の経済生番組なんですけど、何回かこの審議会においてもご批評願いました。このたび、「Kナウ懇話会」という自由闊達な組織をつくりまして昨日、初会合を持ちました。番組に出演いただいた十数人の方々が出席し、私どもも私のほかに専務ら6人が出席致しました。「九州の観光」というテーマで前の週の土曜日に放送した分は3.6%と、この番組としては2番目ですかね、いい視聴率を取りまして、その番組をちょっとご覧いただきました。そのあと、議論していただきまして「九州観光は、どうあるべきか」というようなところまで話が一応、進んだということでございます。

それから、特別番組を幾つか作る予定です。この夏、まず自社制作ものとして「街角偉人伝 九州もん!ザ・グレート」というちょっと大げさな番組タイトルですけど、ユニークなキャラクター、面白いキャラクターの一般の方にご登場願います。ゴールデンアワーの1時間トライアル番組であります。今、「きらり九州めぐり逢い」という旅と町と人、特に人に焦点を合わせた番組を放送していますけれど、それとは別にですね、面白い人をとにかく選んできて制作し、これは果たしてレギュラー化できるかどうかみてみようということですね、趣旨は。そういう意味でトライアルということです。

「じゃあ、どんな人が登場するのか」とお思いでしょうが、JR折尾駅に休みの日には必ず現れる少年、にわか駅員さん。中学1年生ですけども、相当鉄道に関する知識があるそうで、この少年を少し追いかけてみます。それから人工衛星で温泉を探している自営業の人。それから八幡で、鉄の街の盛衰を見届けてきた北九州市伝説の製鉄マンバンド、その人たちを取り上げてみます。9月1日、土曜日の放送です。この番組は、またこの場に

おいてご批評願うということになると思います。

もうひとつの自社制作番組は、ぐっと軽いタッチの「フラで学ぶアロハスピリット」です。フラというのはフラダンスのことで、今、ブームなんだそうです。ハワイでロケし、9月29日の夕方に放送します。これは全国放送です。

最後になりましたけれども、来年度の新卒採用は4月の筆記試験を皮切りに面接を重ねまして、このほど男性3人、女性1人を決定しました。当社は、非常に厳しく新卒の採用人数を絞っておりまして、4人の採用はここ数年間なかったことです。若い人を増やしてさらに活気のある会社になりたいと考えております。

私からの報告は、以上でございます。

(安永委員長) ありがとうございます。

それでは、視聴率報告を矢上編成部長、お願い申し上げます。

(矢上編成部長) 6月の視聴率です。ゴールデンアワー7.4%、プライムタイムが7.0%、全日が3.6%です。GHは前年のマイナス0.1ポイント、全日がマイナス0.3ポイント、プライムは前年と同じでした。在福局では、FBSさんだけがプラスということで、残る4局はマイナスでございます。FBSさんはやはり「行列のできる法律相談所」などが、かなり高いレーティングを出し、さらに「たかじんのそこまで言って委員会」という番組は、あの昼間の時間帯で20%台を出しています。今のFBSはネットの番組が調子いいんで、一人勝ちというような状況でございました。

それからソフトバンク戦なんですが、6月は交流戦主体でした。他局の中継視聴率は資料に記載している通りで、一番高かったのはソフトバンク対巨人の17%、当社も3試合ソフトバンク戦を放送致しまして、平均で13.7%です。これも、昨年よりも2ポイントぐらい高い視聴率でして好調ですね。

それから主な自社レギュラー制作番組の視聴率をご報告させていただきます。「ばりすごボーイガール7」は3.2%、前年が4.4%ですのでマイナス。「九州経済NOW」は2.5%、前年が1.7%でしたのでプラスです。「VIVA!! SPORTAS」は3.4%、前年は別の番組でしたが、3.5%ということで、マイナス0.1ポイントという結果でございました。

ゴールデンアワー、プライムタイムの番組のご報告ですが、資料の黄色の部分は前年からプラスの番組でございます。まず月曜日なんですけれども、「発進!時空タイムス」、これ

はテレビ大阪の制作番組として、6月で終了しました。7月からは、本日ご覧いただきます「三丁目のポスト」です。「発進！時空タイムス」の視聴率は、残念ながらずっと低迷したままでした。

火曜日は「開運！なんでも鑑定団」が16.8%で、好調に推移しております。今週の「鑑定団」も19.1%ということで、歴代5位、相変わらず強いですね。それから水曜日は「いい旅・夢気分」が徐々に前年を上回って、5.9%という数字が出ております。

木曜日の「木曜洋画劇場」も8.7%で、前年からプラス。金曜日はですね、今当社で一番安定している曜日でございます。「ペット大集合！ポチたま」の視聴率は前年を下回っていますが、9.1%、「よろずや平四郎活人剣」は4～6月で終了し、7.8%でした。「所さんの学校では教えてくれないそこんトコロ!」、「たけしの誰でもピカソ」は、そこそこのいい数字が出ています。

それから、土曜日の「きらり九州めぐり逢い」なんですけど、5.4%という結果でして、「出沒！アド街ック天国」も前年を徐々にクリアしたというような状況でございます。

日曜日の「田舎に泊まろう！」は、ちょっとマンネリ化して視聴率が落ちているので、テレビ東京は10月以降、多少リニューアルすると言っています。

簡単ではございますが、私からの視聴率報告を終わらせていただきます。

(安永委員長) ありがとうございます。ホークス戦はこのところ、どうなんですか。

(矢上編成部長) 今週の火曜日が12%台で、今平均で13.7%ですね。

(安永委員長) ああ、そうですか。去年よりはいいのですか。

(矢上編成部長) 去年は11.7%でしたので…。

(安永委員長) ああ、いいんですね。最近のホークスは、調子がよくないでしょう。バッティングがダメだから、もう前半で負けていたら「ああ、だめか」なんて思ってしまっただけ。

(深瀬編成局長) 今週の火曜日の試合は徐々に勝ちましたけれども、視聴率が12%台ですので、そろそろ飽きられてきたのかなという感じがしないでもないですね。

(安永委員長) 試合展開によりますね。後半打って逆転するというのが、めったにないからですね。先行逃げ切りは、ちょっと試合としては面白くないですね。余計なことを言いました。続きまして、視聴者対応報告を深瀬編成局長からお願い致します。

(深瀬編成局長) はい。お手元の資料でございますように6月の対応件数は、合計358件で

した。前月に比べますと、66件増えております。内訳は、問い合わせが281件、要望が48件、意見が27件、指摘が2件ということで、苦情はございませんでした。

合計が増えたのは問い合わせが増えた結果なんですけれども、この大きな要因というのは「日曜ビッグバラエティ」という番組で、6月3日に放送しました「実録！現代の駆け込み寺」に対する問い合わせが、非常に多かったということでございます。番組はリストラですとか、家庭内暴力、あるいは薬物依存といったような現代社会の落とし穴に、はまった人たちの悩み事を解決してくれる個人や組織を扱った内容なんですけれども、その中でも、新宿の歌舞伎町でカリスマ霊能師と言われている韓国人の尼さんが開いているお寺の連絡先を教えてくださいというものが、51件ございました。キー局には実は、これに関してカルト商法、靈感商法じゃないかといったような指摘もあったみたいなんですけれども、私どもに対してはそういう指摘はなくて、とにかく「自分も相談したいので、電話番号を教えてください」というのが、ほとんどでございました。

それ以外では、いつものように「主治医が見つかる診療所」、韓国ドラマ「プラハの恋人」、それからあとは「スーパー！スタジアム」などに対する意見、問い合わせが上位を占めております。

2枚目にまいりまして要望につきましては、いつも通り再放送を希望、あるいはビデオのダビングを希望といったものがほとんどで、これはいつもと傾向は一緒でございます。

それから、意見でございますけれども、6月30日放送の「スーパー！スタジアム」で、間寛平さんをゲストに呼んだんですが、間さんは猛烈なホークスファンということで、視聴者からも気持ちの伝わるコメントで共感できたと、うれしい意見をいただきました。

(安永委員長)　すごくよかったですね。

(深瀬編成局長)　ただ、その半面ですね、ちょっとここには書いておりませんが、「解説者がしゃべり過ぎだ」とか、あるいは中には「解説者がホークスびいき過ぎる」と、それから今茶髪にしているんですけど「けしからん」とか、そういうのが毎回、毎回ございます。

件数は、6月は多かったんですけれども、「駆け込み寺」に関するものが非常に多かったわけで、それ以外は特筆すべき内容はございませんでした。以上でございます。

(安永委員長)　ありがとうございました。

それでは、今までいただいた一般業務報告、それから視聴率報告、視聴者対応報告の中で何か質問なり、ご意見なりありましたら…。

(久保副委員長) の平戸茂工門窯に関する指摘、これはどういう意味ですか。

(深瀬編成局長) これは、キー局が作った「火曜ゴールデン」という番組なんですけれども、15代目茂工門さんという方、兄弟で、どうもお互いに自分が15代目だと名乗り合っているみたいですね、私どもの番組で紹介した方は、弟さんの方だったんですね。ところが、実際はお兄さんの方が15代目ではないかという指摘が、これはご本人からじゃないんですけども、違う方からございました。それで、テレビ東京には確認をとったんですけども、自分たちは本人を頼りに確認をとって制作をしているということで、確信を持ってやっているということでございました。

(安永委員長) そのほか、何かございませんか。

それでは、番組試写・合評で、きょうは「三丁目のポスト」ですか、何か事前にご説明があるのでしょうか。

(深瀬編成局長) これは、ゴールデンアワー、唯一キー局以外のテレビ大阪がネットで放送している番組でございます。今までは「発進！時空タイムス」、先ほど申しましたように、「発進！時空タイムス」という番組をテレビ大阪が作ってございましたけれども、これがあまり視聴率が芳しくないということで、6月末で終わりましたこの7月から、その後番組としてスタートした番組でございます。

中身は説明するよりも、ご覧いただければ、こういうテイストの番組だということがわかるとと思います。

{番組試写「三丁目のポスト」7/23(月)午後8:00～8:54}

(安永委員長) 礒山さんは、どれぐらいからご覧になられましたか。

(礒山委員) ほとんど、最初から見ました。

(安永委員長) それでは、いろいろございますでしょうけれども、忌憚のないご意見をということで、森本さんから口火を切っていただきましょう。

(森本委員) 印象ですけども、今日は二人の方、高木美保さん、杉浦太陽さんとも心にジ

ーンとくるようなお話でありました。高木さんの場合、亡くなった親友のりゑさんとの話、それからりゑさんのご両親とその後、23年間も交流があるなど、非常に感動的な話ですね。太陽さんのものについても、芸能の世界に入っていくことの難しさが描かれ、おじいちゃんとか、お母さんが出てきますが、かなり有名になった方、半分公の立場の方のプライベートの話なわけですね。だから、我々から見ると、どこまで本音でしゃべっているのかなという印象をずっと持って、話としては非常によくできているんですけども、まんまとすると、でき過ぎなところがあるという印象をちょっと持ちました。

ただ、こういう親子の関係とか、苦しいときに本当に力になってくれる人とかがだんだんと少なくなっていった、世間ではいろんな問題が起こっている、むしろこういう番組を通じて、本当の親子の気持ちであるとかを表現できればいいですね。ちょっと印象に残ったのは、太陽さんと母親が、夜中におじいさんのお墓参りしたシーンです。お墓に水をかけて「これで力がわいてくるよ」と母親が言ったら、そうなったということで、太陽さんも前向きな考えに変わっていったというようなことを言っているのですけれども、そういう話というのはもう最近、ほとんど聞かないんですね。だから、やっぱりテレビを通じて、こういう話をしないといけないのかなというような感じも持ちましてですね、そういう意味では、ちょっと寂しい気も致しました。でも、だれかがこの生きるための力、生きるための心を伝えていくということをしていかなきゃいけないのですけれども、そういうことが、この番組を見ると、逆に弱くなってきたのかなという感じを持ちました。以上です。

(安永委員長) ありがとうございます。一応、評価するということでしょうか。

(森本委員) そうですね。

(安永委員長) 南委員は、いかがですか。

(南委員) 自分との関係で言ったとき、よく知らない人たちの話なので、クラスでしているクラスメートの話の中に僕は入っていけてないというか、話題についていけないというか、この人たちにそこまで関心を持ってないというか、そんな感じです。その上での感想というと、入口のところで、ちょっと何でこの人たちの身の上話にここまで入らなきゃいけないのかなと考え、もう外れてしまいます。だから、どういう人たちがこの番組を見て楽しむのか、逆にお尋ねしたいところなんです。

手紙というすごく地味なものを中心にして、これだけの番組を作ろうとしています、今

はやっているメールって手紙ですよ。だから、案外手紙を使った伝え方を若い世代に対しても訴えているというところがベースにあるんだろうなと、再認識はできます。その新鮮さというか、手紙のああいうべたな自分の気持ちを打ち明けようなところが、受けると思いました。

今度、「街角偉人伝 九州もん！ザ・グレート」という番組を放送するというお話でもありますし、今の流れでいくと、むしろ普通の人の方が面白く、ここでもそういう番組を幾つか見せていただいて、そっちの方はすごく感動するわけです、逆にね。この番組はその全く逆で、芸能人なんだけど、実は普通の人なんだという、そういう見せ方なのかなというところがあります。友達もいるわけだし、親もいるわけだし、そういう意味ではまさに普通に見えるし、スタジオで身の上話をしているので、スタジオがごく普通の空間になっているところを我々はテレビで見せられているのかなというふうに、あえて解釈すると、そういうように思えました。

(安永委員長) 次は、阪本さん。

(阪本委員) 手紙というものは、今の時代にもうあまり出すことも、もらうこともなくなっている中で、手紙の役割みたいなものを多分、もう一回再発見しようというような趣旨だろうと思うんですが、その辺は割と伝わってくるかなという気もしました。

ただ、最初に高木美保が出てきたとき、あの人は非常によくブラウン管に出ている人なので、「またか」というのと、しかもよく泣いていますので、また同じテイストなのかなという点をちょっと感じました。ストーリーはわざとらしさがあまりなくて、親友の両親が出された手紙というのもこれも番組のために多分わざわざ書いたんでしょうけれども、それも内容としては、そんなに取って付けた感がないですね。そういう意味では、高木さんにまつわるこういうエピソードを発掘してきた番組制作の人たちの狙いは、うまくいった、成功したんじゃないかと思います。

ただ、この番組だけの話じゃないんですけども、改めて思ったのは、例えば「波乱万丈」のような、あるタレントの過去を振り返るとい同種の番組も結構あるので、テレビというのは、本当に特定のタレントをぼろぼろにすり切れるまで賞味し尽くすというようなところがあるのかなと感じました。今、南委員が仰いましたけど、一般の人からより光った人を発掘するというのも一方でやっていかないと、やっぱり視聴者の方が慣れてしまうという

か、飽きてしまうというか、それこそ「またか」という感じを持ってしまうんじゃないかなと思いますね。ただ、そこは非常に難しいところなんですけど…。もう一人の芸能人はあまり知らなかったの、知らない人だと、なかなか番組の中に入り込んでいけないというのがあって、高木さんはよく知っているの、そっちの方はまだ入っていったという部分がありました。これは一概に言えなくて、あまり知名度のない人とか、親しみのない人を使っていると、またこれはなかなか見てもらえないし、本当にテレビというのは難しいもんだなという印象を改めて持ちました。以上です。

(安永委員長) ありがとうございます。こういう番組は、女性の意見が大変、気になるというか、関心があるんですが、古賀さんいかがですか。

(古賀委員) ゴールデンアワーなのに、テンポがなかったですよ。だれをターゲットにしているかわからなかったですね。すみません。今回、最初から、入口から、もう引いていて「三丁目のポスト」は多分、コミックの「ALWAYS 三丁目の夕日」のもじりだろうと思うんですけども、あれは昭和30年代の回顧録だと思うんです。昔を懐かしむにしては、出ている人が若い人であり、そのところに違和感がすごくあったんですよ。

後半は面白なくて、作り物という白々しさがあったんですよ。だから、後半は見る気がまるっきりないし、退屈しました。先ほど言われたんですけど、次の展開がかなり難しいんじゃないかなと、ああいう同じような展開だったら全く面白くないし、今後どうなるんだろうと感じましたね。

今回はちょっと辛口ですけど、やっぱり全体的に面白くないなと、もうお涙ちょうだいも飽きたなあというところでした。以上です。

(安永委員長) ありがとうございます。結構、厳しいんですね。礒山さん、お願いします。

(礒山委員) すみません。今日、遅れてまいりまして申し訳ございません。

先ほど言われましたように、前半と後半ですよ、内容の重さの違いみたいなものがものすごく出ていて、やっぱり後半の方は軽薄な感じがしました。前半部分、高木さんという女優のところをもう少し深く掘り下げていていただいた方がよかったんじゃないか、構成的には逆にした方が番組としては盛り上がり終わったんじゃないかと思いました。

やはり手紙の重さというか、特に新しく書いた手紙と過去に書いた手紙とを見比べ、過去と現在の思いといったものをあぶり出すことは非常に大事だと思うし、手紙の重要性をもっ

とこういう番組を通じて紹介していくという手法は非常にいいと思います。最近、海外のある番組を見ていたら、今はほとんどEメールを使っているのに、英語で普通のメールはですね、エアメールをわざわざリアルメールという表現をしていました。やはり手紙というのは、Eメールで軽く伝わるものじゃなくて、手書きで、文章の中にいろいろな思いがあるときはにじみ出ていて、重みというのを感じると思います。メールだと、ついついメールに出てくる文字に沿って、文章を打っていくようなところがありますが、やっぱり手で文章を書く重さというのを私、非常に最近感じていましてそういう意味では、特に前半のところの過去に書かれた本人からの手紙などは、手紙の重要さというのを感じさせてくれたので、非常によかったと思います。

先ほども意見が出たように、今後の展開はどうなるのかということが少し心配です。それと、芸能人のプライバシーをのぞき見するみたいなのところも、ややちょっと番組としてはあまり好きじゃないけれども、いろんなテーマに合わせて今後展開されれば、いい番組になるんじゃないかと思っています。以上です。

(安永委員長) ありがとうございます。伊豆さんの感想はどうですか。

(伊豆委員) 私は正直、この番組は最後まで見ませんから(笑い)。「こんな番組、見せられてたまるか」という感じです。私はアナログ派でして、ほとんど手書きの手紙を書くたちなので、すごく期待して見たんですが、ポスト、手書きの手紙を重要視しながらも出演者から出る言葉はメールのやりとりばかりなので、全然ポストになってないじゃないかと感じました。たとえメールを100回やりとりしていても、そこはやっぱり番組の性格上、あくまでもカットしてしまうというような、趣旨に沿った番組作りが必要だなと思います。

それと、やっぱり少なくとも有名人の手紙とうたっているのに、キャスティングがもともとミスだと思います。中途半端な芸能人を持ってこられても全く共感できません。今どき芸能界で、極貧の生活をして母親が看病したぐらいでドラマにされたんじゃ、素人の立場がないという感じで、こんなのでドラマチックな要素なんか、ほとんどないですよ。これは、ほとんどできちゃった結婚を美談にするために事務所側の意図的なコントロールがあったというふうにはしか、どうみても思えないので、大抵の人はもうその時点でチャンネルを変えてしまうという感じですね。

(礒山委員) そこまで言うんですね。

(伊豆委員) だから、やっぱりある程度、手紙を持ってくるからには、それなりのステータスがある人、もう人生がある程度固まっていて、この人はこれ以上スキャンダラスなことを起こさないとか、もしくは逆にものすごくスキャンダラスなことを起こしたとか、そういうドラスチックな人を出してもらいたいと思います。

逆に私は武田信玄の手紙は、すごく期待して見たんですが、それがただ彼が男色だったという紹介の仕方だったですよ。戦国の武将であれば、男色なんか当たり前のことなのにね、それをあえて男色だったと強調し、非常に作り手が教養のなさを見せて、「私はばかです」ということを言っているのと同じなわけで、そういう物見遊山的な紹介の仕方というのは、非常にナンセンスですね。だから、出演者にそういうものが期待できないのであれば、例えば作家とか、過去の女優さんとか、さまざまな人たちの素晴らしい手紙がものすごくあるわけですから、そういう人たちが送った手紙、実はこの人とこの人は、こういう手紙を交換したとか、女を取り合った男と女がこんな手紙を交換していたとか、そういう話は小説家の中にごまんとあるわけですから、そういう素晴らしい手紙を紹介してほしいですね。例えばレターセット、手すきの和紙のこんな便せんがあるとか、こんな切手が今だったらお薦めですか、書き出しは実はこうやってほしいとか、本当は知っているようで、知らないような手紙のマナーとか、ルールとか、そういうことをちょっと挟んで教えてもらって、少しはためになったというような番組にしていきたい。

それと、大阪の制作でありながら、このどうしようもない杉浦太陽と母親の全く関西弁になっていない関西弁、どんなにやったら、こんな全く関西弁になってない会話ができるんでしょうか。「だれが一体、この台本書いたの」という感じで、関西人はこの関西弁を聞いた瞬間にチャンネルを変えます。だから、大阪が作っているんだったら、逆にもっとリアルな関西弁をもって会話をやってほしいなと、どこをとっても番組そのものが中途半端で、長く継続されるとは思われない久々の番組ですね(笑い)。趣旨には、賛同していますよ。

(安永委員長) 久保さん、いかがですか。

(久保副委員長) 見とりましてですね、こういうテレビは怖いんだなと思ったのは、武田信玄のブラックポストですよ。本当かどうか、それはわからない話をパッと流して、「男色だったんですよ」と、あの英雄をこういうふうにバーンと放送したら、これ見た人は、「武田信玄はそうだったんだな」と思い込むところですよ。だから、本当かどうか、もうちょ

っと検証した上で放送しないと、ものすごくやばいなあと思いましたね、武田信玄に関しては。男色であってもどうでも、それは関係ないんですが、一般的にはマイナスのイメージですよ、あの戦国の武将がそういう趣味だったというのは。だから、それをやっぱり流す以上は、もうちょっと検証してやらないといかん。だから、ここにテレビの怖さがあるんだろうと思うんですね。

それから、高木さんの話、大したことない話を何度も何度も、何であのくらいのことで高木さんが泣くんだろうかと思いました。たまたま自分がスターに選ばれた。当たり前のことですよ、みんなから選ばれるんだから。夢破れた友達が田舎に帰った。交通事故に遭った。普通だったら、葬式に行ったと思いますよ、でも、本人は葬式に行っていないですよ。それで涙流して友達のパパ、ママとおつき合いをしている。「それが別にどうしたの」と、見よったら非常に白々しい感じがしました。

もう一つ、杉浦太陽さんはメールを100回打ちながら、おわびを手紙で書いている。ここは最大の皮肉かなと思って見ました。本人が直筆で書いていましたよね、手紙は。今ラブレターを書かんようになったから、相互のコミュニケーションが伝わらなくなったと言われている。その通りだろうと思うんですね。だから、それを裏返しにしてこの手紙の重要性を訴える番組かなと、実は私も思ったんですが、全然違っててですね、非常に軽薄なというか、もうぼんぼんぼんぼんと、大したことない話が涙、涙、涙だったと思うんです。伊豆さんと、ほとんど同じ意見になった感じですが、そういうふうな感想を持ちましたですね。

(安永委員長) 皆さん、大体仰ったので、もう私は言うことがない。特に、伊豆さんの批評に私も全く同感でありまして、我々世代からすると、知らないタレントばかり出ていましたからですね。

(深瀬編成局長) 正直申しまして、実はこの番組を審議会にかけることには迷いました。相当、酷評されるだろうと思いつつも、あえて辛口のご意見をお伺いして、制作者に伝えたいという思いもございました。

実は、これ3回目なんですけれども、1回目の出演者は高橋英樹さんでした。「桃太郎侍」が始まった当初は、非常に低い視聴率だったらしいんですね。非常に地味な番組だったらしいんですけれど、ところが、山城新伍さんからの手紙でいろんなアドバイスをもらって、「一つ何とか…」というあの決まり文句ができた、そういう転機が1回目は描かれていた

んです。高橋英樹さんというメジャーな俳優で、一世を風靡したその「桃太郎侍」の転機。それで実は2回目以降、期待していたんですけども、2回目はスケーターの織田信成で、そして3回目がこの二人ということで、メジャー感がなくなって1回目とだんだん違ってきたなど、正直私どもも思っているところでした。非常に今日はいいご意見をお伺いできたと思っております。

(安永委員長) やっぱ、タイトルも「三丁目の夕日」のもじりでしょうね、多分ね。だから、僕も見てなかったんで、ドラマかなと思っていたんですよ。その辺の期待も裏切られたと思っているんですけども……。ちょうど時間になりましたので、終わりたいと思いますが、事務局から何かございますか。

(小曾我放送審議室長) 例年通り、8月は休会に致しますので、よろしくお願いします。

9月は27日、第4木曜日の同じ時間です。

(安永委員長) それでは、今日はこれで終わります。(了)